

創刊30周年を迎え、ますます面白く。

季刊

中医臨床

CLINICAL JOURNAL OF TRADITIONAL CHINESE MEDICINE

- 定価 1,650 円（税込・送料別 210 円）●1 年予約 6,600 円（4 冊分・税込・送料共）
- 2 年予約 12,600 円（8 冊分・税込・送料共）●3 年予約 18,000 円（12 冊分・税込・送料共）

『医学生のための漢方医学』【臨床編】

好評の分野別連続特集が、さらに充実！

- ◇漢方適応となる疾患を取り上げ、まず簡単な西洋医学的知識を載せ、ついで漢方治療について紹介する。
- ◇中医学の病態認識・治療法をベースに、日本漢方の経験を加え、さらにエビデンスデータも収載。
- ◇中医学と日本漢方が有機的に結びついた、画期的な試み。



- 通巻 127 号：眼科疾患 ●通巻 125 号：循環器疾患（後篇）
- 通巻 126 号：腎疾患 ●通巻 124 号：循環器疾患（前篇）

近日発行 6 月号（通巻129号）では、「血液疾患」を取り上げます。

詳しくは当社ホームページをご覧ください。

<http://www.chuui.co.jp>

老中医とは現代中医学を築いた革新者

注目記事

「老中医の魅力——任応秋」(通巻 128 号)

現代中医学を形づくった老中医の事跡をたどり、その特色を浮き彫りにし、現代からみた歴史的意義を考える。

今回、老中医の筆頭として任応秋先生（1914～1984年）にスポットを当てる。

編集部では、任応秋先生は新中国成立初期から秦伯未先生（衛生部中医顧問）とともに現代中医学の理論面を確立した中心的人物であったとみており、現代のわれわれが現代中医学を振り返り、未来へとつないでゆくためには、任応秋先生から始めなければならないと考えたからである。

任応秋先生の果たした仕事は広範に及ぶが、①中医学の理論面の確立、②中医古籍の整理、③流派の研究に集約できよう。とりわけ「各家学説」創設の意義は深い。特集では、任応秋先生の長女である任廷革先生（北京中医薬大学基礎医学院）に、任応秋先生の伝記を執筆していただくとともにインタビューも行って任応秋先生の実像に迫った。さらに、任応秋先生が中医学の核心として弁証論治を提唱した背景を分析した論文や、1975年から7年間中国に留学し直接教えを受けた兵頭明氏（後藤学園中医学研究所所長）のエッセイなどで構成する。



東洋学術出版社

ご注文は、メールまたはフリーダイヤルFAXで

FAX: 0120-727-060

最近号の読みどころ

その1

臨床実践にマッチした中医弁証とは 「病機を核心にした弁証論治の新体系」 周仲瑛ほか (128号)

「数十年来、多くの医学者たちが証候を中心とした弁証論治の研究を進めてきたが、今に至るまで特筆すべき進展がみられない」

そう指摘するのは、中医診断学の旗手であり、南京中医薬大学の老中医・周仲瑛先生である。

症状・所見から証を弁別し、それを各類型に分類するというのが中医弁証の伝統的なパターンであるが、症状・所見

は各人の体質や病歴などによって複雑に変化するうえ、証候分類が多すぎて統一できず、ややもすると機械化・硬直化しやすいため、柔軟に弁証するという中医学本来の特色や利点をうまく発揮できていないという。

そのため、周先生は病機を審らかに観察することが弁証論治の鍵であるとしたうえで、「病機証素」という概念を使って、病機を中心とした弁証論治の新体系を提案する。

その2

中医学を取り巻く最近の動向をピックアップ 巻頭企画「文化としての中医学」(128号)

近年、中国ではソフト・パワーの源泉として、中国の伝統文化が重要視され、とりわけ中医学は中国の伝統文化を代表する1つと位置づけられている。

国家戦略として、文化産業を振興して、国内で自国文化を発揚するのはもちろん、積極的に対外進出をはかり、中国伝統文化の世界進出を展開している。中医復興をはかる中医学従事者と国の戦略とが一致し、同じ方向に歯車が噛み

合い推進力は倍加している。

本企画では、背景となる国家戦略の動きを押さえながら、具体化している事例を紹介する。さらに中医文化学科の創設者である張其成教授（北京中医薬大学管理学院院長）にインタビューを行い、中医学における伝統文化の位置づけについてお話を伺った。

その3

歴代の名医に学ぼう 「黄耆の使い方」 薛娜ほか (127号)

近年、慢性腎不全において黄耆にクレアチニン低下作用があるという報告が相次いでいる。医療用漢方製剤に黄耆末を加える方法が取られるケースも多いようだ。

そんな黄耆は、「さまざまな補気薬のなかでも最も優れている」と称賛され、歴代の医家らも常に手元に置き、臨床において遺憾なくその効果を発揮してきた。

本稿では、『傷寒雑病論』の張仲景、補中益気湯を創方した李東垣、補気と逐瘀の方法を結合して応用した王清任、『医学衷中参西録』のなかで黄耆について深く考察した張錫純、現代の名医で慢性腎炎に黄耆と地竜を組み合わせて活用した朱良春、現代の黄耆応用の第一人者で重症筋無力症によく用いた鄧鉄涛らの黄耆の使用経験を紹介する。

その4

『傷寒論』にまつわる疑問 「『宋板傷寒論』の特徴って何だろう」 別府正志 (126号)

『傷寒論』は「宋板」こそ最善本であるとされている。しかし「宋板」が出た頃、当時の医師らが仰天するような内容のヘンテコ本だったとしたらどうでしょう。

『傷寒論』にまつわる疑問を解き明かす連載の第4回目は、こんな刺激的なコメントで始まる。

筆者は、「宋板」とは、隋唐代を生き延びてきた古代中国医学を、校正医書局のエリート医師たちがかき集め、彼らが信じる「良き姿」に大幅に書き直した書であるが、特に

手を入れたのが六経篇であると指摘する。

一例として、筆者は六経篇の条文数の偏りを指摘する。とりわけ太陽病篇のボリュームの大きさが目を引くが、各篇の始めにある一字低格下条文を除くと、太陽病篇 178 条、陽明病篇 84 条、少陽病篇 10 条、太陰病篇 8 条、少陰病篇 45 条、厥陰病篇 56 条である。

本稿では、なぜこのような不自然な編集が行われたのかを解明する。